

仏法寺跡出土柿経

—筆致から探る写経形態の諸相—

鈴木 絵美（文化財課 埋蔵文化財調査員）

1. 遺跡の概要

仏法寺跡は 2003 年度に鎌倉七口（七切通し）の一つでもある「極楽寺坂」周辺の国指定史跡登録に向けて五合枡遺跡（仏法寺跡）として発掘調査が行われた。その調査では極楽寺切通しの南、極楽寺地区、坂ノ下地区にまたがる霊山山稜部に合計 4 カ所の調査地点が設けられたが、柿経が出土したのは D 区とされる霊山山頂に向かう尾根の東側中腹の仏法寺跡と推定される一画である。

調査では仏法寺とみられる礎石建物や基壇の一部、溝、池跡が発見され、五輪塔、かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、金属製品などが出土した。池跡から堆積土の違いにより中層～下層とした土層から大量の柿経が出土している。

報告では保存処理中であったため、遺存状況が極めて良かったもののみ提示されている。破片数で 6400 点以上にも及ぶ柿経について再整理を行い、その過程を経て得た新たな知見についてここでご報告する。



図 1 調査地点位置図
(鎌倉市教育委員会 2003 より転載)

2. 仏法寺跡出土柿経について

①出土した柿経の概要

池から出土した柿経は共伴する遺物から中層は 14 世紀末～15 世紀代、下層は 13 世紀後半代所産と想定される（福田 2013）（註 1）。その形状や筆致について中層と下層出土では違いが認められる。今回それぞれの筆致の特徴をもとに次節で分類を行った。

柿経の内容に関しては概ね法華経であり、全八巻ある法華経の一から八巻までの経文が確認されている。一部法華経以外の経典も確認できる。

中層、下層ともに片面書写のものが多く、両面のものもごく少量みられる（註 2）。

柿経は破片の総点数で 6400 点を超える。内訳は中層 1250 点、下層 2779 点、中・下層 2396 点である。ただ下層の柿経はとくに遺存状態が悪く、小片のものも多いため、書写されている経典の内容が不明のものもカウントしているため破片数としては多くなっている点はここで断っておきたい。また調査はトレンチ調査で行われており、報告書でも指摘されているように、検出したのは池の一部であり、調査が及んでいない部分にはまだ多くの柿経が埋没している可能性がある。

報告書中では中層、下層出土それぞれの柿経に使用した木材の樹種同定が行われ、ヒノキとサワラという二種の木材が使用されていることが明らかとなっている（三村 2003）。

②中層・下層出土柿経—形状から見た違い（写真1・表2）

出土した柿経は先端が圭頭状に加工されていることは共通するものの、中層と下層出土のものでは、若干ながら幅や厚さなどのサイズに差が認められる。中層は幅が若干狭く、1.0～1.3 cmの幅をもち、個体差が大きくなっているように見受けられる。一方で下層の柿板の幅は1.1～1.4 cmで比較的幅広の板に大きな文字で書写されたものが多く、概観からも中層出土のものとは凡そ区別できる。

③筆致からみる書き手の分類

中層から下層出土の柿経を通してみると、記されている文字の筆致にそれぞれ特徴があり、まずはその分類を行った（註3）。併せて經典のどの部分にあたる内容なのかを考慮することで、写経の分担の詳細を探る。

今回中層～下層を通して異なる筆致と確認できるのは仮に記号を振ったものでA～Pの16通りあり（写真1）、そのうち下層のみ確認できる筆致は主に二者、AとBである。Aは法華経第4巻法師品第十の8、9、11行目である。Aの筆致と同一と認められるものとしては、この他に第8巻の妙莊嚴王本事品第27の40～79行目までを書写したものなどが確認できる。Bとして示したのは法華経第3巻の化城喻品第7の42、67、65行目である。Bと同一の筆致とみられるものは他に、第4巻の授学・無学人記品第9、法師品第10の数行などがある。A、Bの他に異なる筆致と認められるものもあるが、数は多くなく小片でもあるため詳しくは分からない。

それに対して中層のものは筆致に多様性が認められる（写真1-C～P）。Cとしたものには遺存状態が良好な一群が含まれ、まとまった行数が確認できる。とくに法華経第3巻化城喻品第6の34～51行目、第7の209行目～231行目、金剛般若波羅蜜経第1巻210行目～225行目などが同一筆致を持ち、同じ書き手と想定できる。D、E、F、J、L、Pなどの筆致はC同様に連続するまとまった一群があり、分担や順番等について検討の余地がある（註4）。

中層は確認できただけで、14パターン以上の筆致の違いが認められ、中層の方が下層より多くの写経者が携わっている可能性がある。

また經典の内容においても同じ經典の異なる筆致のものが少なくとも2パターンはあり、これは単回ではなく少なくとも2回以上は写経が行われたことを示唆している。さらに中層出土の柿経は大部分が片面写経であるが、先にふれたように両面写経が少量見られる。これをどう捉えるか可能性はいくつかあるが、複数回行われた写経の内、両面写経で行われた回があったと考えるのが自然であり、異なる機会に片面写経と両面写経の写経が行われたことが想定できる。これらのことを考え併せると、中層にあたる14世紀末から15世紀代には、下層の時期(13世紀後半)に比べ、より規模の大きい写経形態、もしくは単回ではなく複数回写経が行われるような環境があったことが想定できる。

もう一点課題として挙げておきたいのが、写真1-D(9～11)とした書き手による法華経以外の経文についてである。仏法寺跡の柿経では法華経第一～八巻の他に解結二経である『無量義経』『仏説観普菩薩行法経』と浄土三部経のうち『阿弥陀経』と『仏説観無量寿経』が確認できる（註5）。この書き手「D」によると思われる資料のうち9～11は法華経、解結二経、浄土三部経にも含まれない『仏説甚深大廻向経』という經典の経文である（表3）。この經典は書き手「D」のみにより写経されており、23行ほど確認できる。複数回行われた内の一回にこの經典を写経し、埋納したと想定できるが、その意義について未詳と言わざるを得ない。



A(下層)



B(下層)



C(中層)



D(中層)



E(中層)



F(中層)



G(中層)



H(中層)



J(中層)



K(中層)



L(中層)



M(中層)



I(中層)



N(中層)



O(中層)



P(中層)



“番付”がつく柿

(執筆者撮影)

3. 二時期にわたる柿経―“雨乞い”の霊地から“作善”の儀礼を行う場へ…

以上のことを踏まえると、報告書でも指摘されているように、仏法寺がある霊山一帯は 14 世紀末～16 世紀は墓地あるいは供養の場としての性格が強まる時期にあり、14 世紀から 15 世紀とされる中層出土の大量の柿経はその流れの中で捉えられそうである。

柿経が納経された 13 世紀後半代と 14 世紀末から 15 世紀にかけて、この二時期はどんな状況や背景があったか。見つかった遺構から考えると、まず D 区では 13 世紀末頃に池北隣の山際に東西 2 間（6 m 以上）、南北 4 間（12m 以上）の鎌倉石を用いた礎石建物が検出されている。山際には調査が及んでいないため、さらに大きい建物であった可能性がある。いずれにせよこの建物が仏法寺に関わる建物と考えられる。13 世紀後半といえば、忍性が文永四年（1267）に極楽寺に移住し、本格的に極楽寺境内の整備が進められた時期にある。その最中、境内一画にある仏法寺の前面の池で柿経が池に納経されることの意義を考える時、思い起こされるのが、文永八年（1271）6 月に行われた日蓮と忍性の雨乞い対決の伝承である。極楽寺に残る「極楽寺境内絵図」にも仏法寺のある辺りに「請雨池」と記されている。ただ時期を同じくして日蓮と忍性の雨乞いの伝説は近隣の田辺池にもあり、仏法寺出土柿経とこの伝承を直接結び付けるのは難しいと考える。雨乞いの記述は『吾妻鑑』にもいくつか見られ（註 6）、当時鎌倉でも抑えるべき天災の一つとして、雨乞いは重要な祈禱であった。雨乞いの祈禱が行われる地は『吾妻鑑』から元仁元年（1224）以降「七瀬禊い」の霊所として現れることから、13 世紀代にかけては仏法寺がそれと同等かそれに準じるような「場」の性格をもつものとして認識がなされていたことが推測される。

その一方で、14 世紀から 15 世紀とされる中層で見つかった柿経は、下層とした 13 世紀後半の柿経に比べ、多くの写経者が携わったことが想定できる。この時期は池以外の遺構においても、もともと鎌倉期から整備されていた土塁や塚、石塔などが 14 世紀から 16 世紀にかけて改めて整備され、最終的に遺物が塚頂部にまとめられていった可能性が指摘されており、改めて墓所、あるいは供養の場としての性格が強まった時期とみられている（福田前掲）。仏法寺の記事から元龜三年（1573）極楽寺一帯に火事があり、仏法寺は残ったとあることから、建物自体は残っていた（註 7）。さらに明暦三年（1657）には恵性が仏法寺を写して方丈としたとあることから、17 世紀半ばまで建物等が残っていて（註 8）、14 世紀末～15 世紀にかけての仏法寺は十分に機能していた時期と考えられる。これらのことから 13 世紀以降も仏法寺が寺として機能しつつ、納経が行われるような空間であったことが想定できる。

残念ながら仏法寺出土柿経から納経の目的が直接伺えるような記述は今のところ見つかっていない。鎌倉や周辺地域で見ついている他の柿経を例に挙げてみると、14 世紀以降の柿経はもともとの柿経の目的である「作善」、もしくは「追善」を目的とした納経が多く確認できる（註 9）。

その中で一例をあげると、鎌倉五山第一位として有名な建長寺でも元からの渡来僧“一山一寧”の居した「玉雲庵」跡と推定される地点で柿経が出土している。その内容から貞治七年(1368)正月二十五日に写経がなされ、その後 14 世紀末頃にまとめて土坑に埋納されたと考えられる（木村・藤原 1996・鈴木 2023）。その資料の中に「右志者為…出離生死頓證菩提也」（註 10）や「聖順禅尼」とあることから、亡くなった者への追善供養が目的であったことが分かる。これらのことから 14 世紀以降も雨乞いを目的とした御祈禱としての柿経の埋納が行われた可能性はあろうが、建長寺や覚園寺などの事例などを考え併せると、そもそもの柿経の目的である「造塔」の功德と「写経」の功德を併せて、自他の作善・追善を願うための「柿経」という性格が強くなる時期のものとして仏法寺跡中層の柿経も捉えられるのではないだろうか。言い換えると、14 世紀以降、寺やそれに付随する庭園などで行う「作善」もしくは一

族の「追善」供養を目的とした柿経納経へと特化していく一過程として仏法寺跡出土柿経も理解できると考えられる。

まとめにかえて

仏法寺跡出土の柿経について、中層と下層出土それぞれの形状、筆致等を分類することで、写経の分担を探ることを試みた。その結果、中層とした13世紀後半にはごく少ない人数での写経が予想されるのに対し、14世紀末から15世紀には多くの人数が携わった、より規模の大きな写経形態が予想されることが分かった。また中層とした14世紀末～15世紀代には法華経や解結二経以外にも『仏説甚深大廻向経』という経典の一部を写経していることが確認できた。現時点で確実に同一書体と考えられるものみの抽出を行ったため、より多くの書き手が携わっていることは必至である。今後の課題としては筆致の詳細な分析とともに、それぞれの書き手が経典のどの部分の写経を担ったのか併せて考察することで、分担などの具体的な写経形態に近づける可能性がある。

またこの二時期にわたる柿経の納経には仏法寺とこの周辺の「場」の性格の変容が背景として横たわっている。13世紀末の鎌倉周辺で盛んに行われていた呪術的な儀礼が行われるような“聖地”ともいえるべき「場」から、14世紀から15世紀にかけて供養の場としての色を濃くしていく状況を示す貴重な資料の一つといえる。

	年号	日付	記事原文	現代語訳
『吾妻鑑』	承元二年 (1208)	六月小十六日甲申	快晴。自去月至今。不降一滴雨。庶民失耕作術。仍被仰祈雨事鶴岳供僧乃處。群江嶋。祈請龍穴云々。	雨が降らず、雨乞いの祈り。八幡宮の坊さんを江ノ島に召集。龍穴にてご祈禱。
『吾妻鑑』	承元二年 (1208)	六月小十七日乙酉	寅刻。甘雨降。祈請感応也	寅の刻に有りがたい恵みの雨が降る。お祈りをさせた効果であろう。
『吾妻鑑』	元仁元年 (1224)	六月小六日壬申	…中略…仍今日為祈雨 被行靈所七瀬誠…中略此誠。関東今度始也。	靈所(由井浜・金洗沢池・固瀬河・六連・袖河・杜戸・江島龍穴)にて七瀬誠い。このお誠いは関東で初めて行うものである。
『吾妻鑑』	延応二年(1240)	六月小二日乙未	炎旱涉旬。折法事。日来若宮別当法印。依無効驗。今日。被仰付勝長寿院法印良信云々。	日照りが続き、雨乞いの祈りをこのところ八幡宮筆頭の法印定親に命じてきたが、効果がないので、今日勝長寿院の法印良信に命じた。
	文永八(1271)		時宗により忍性に雨乞いの祈禱を命じられる	時宗により忍性が田辺池にて雨乞いの祈禱を命じられる。
	文永八(1271)		日蓮、忍性の雨乞い対決	仏法寺一「極楽寺境内絵図」に「雨請池」
	正安三(1301)		忍性の雨乞い伝説	忍性 田那谷龍池で祈雨祈禱。

表1 「雨乞い」関連の文献記事等

出土層位	写真	分類	經典名	卷	品	行	文字	片面 /両面	法量①長さ (残存値)cm	②幅	③厚さ
下層	1	A	法華經	4	10	11	提記若復有人受持誦誦解說書	片面	(16.5)	1.4	0.02
	2	A	法華經	4	10	9	之後若有人聞妙法華經乃至	片面	(16.2)	1.4	0.02
	3	A	法華經	4	10	8	阿耨多羅三藐三菩提告葉王	片面	(16.1)	1.4	0.02
中層	4	B	法華經	3	7	65	至梵宮六種震動大光普照遍	片面	(10.6)	1.3	0.02
	5	B	法華經	3	7	67	殿光明照曜倍於常明諸梵	片面	(10.2)	1.3	0.02
	6	B	法華經	3	7	42	恭敬尊重讚歎到已頭	片面	(9.2)	1.2	0.02
	7	C	法華經	3	7	220	多羅三藐三菩提心大通智勝佛過八万四 三十九下 ○(サインか?)	片面	20.4	1.3	0.02
	8	C	法華經	3	7	219	那由他恒河沙等衆生示教利喜令發阿耨	片面	20.5	1.2	0.02
	9	D	仏説甚深大 廻向經	不明	不明	不明	現在諸仏所修慈身行慈口行修慈心行修	片面	21.8	1.3	0.02
	10	D	仏説甚深大 廻向經	不明	不明	不明	彼慈心行明天是則菩薩魔訶薩於過去当	片面	21.8	1.3	0.02
	11	D	仏説甚深大 廻向經	不明	不明	不明	彼身口善根念仏功德至誠恭敬是為菩薩	片面	21.8	1.3	0.02
	12	E	法華經	5	12	66	殊師利言此經甚深	片面	(6.8)	1.4	0.02
	13	E	法華經	2	3	320	著愛欲為此等故	片面	(8.7)	1.2	0.02
	14	E	法華經	5	12	67	有衆生勤加精進	片面	(7.0)	1.1	0.02
	15	F	法華經	4	11	113	聖主世尊雖久滅度	片面	(6.2)	1.3	0.02
	16	F	法華經	4	11	106	在七宝塔中師子座	片面	(6.5)	1.3	0.02
	17	F	法華經	4	11	114	諸人云何不勤為	片面	(5.6)	1.2	0.02
	18	G	法華經	3	6	100	小劫像法亦住四十四小劫爾時世尊	片面	(14.6)	1.3	0.02
	19	G	法華經	7	23	148	宿王華此菩薩成就如	片面	(7.7)	1.3	0.02
	20	G	法華經	1	1	191	雖復誦誦衆	片面	(6.4)	1.3	0.02
	21	G	法華經	8	25	19	音菩薩名者是	片面	(8.4)	1.3	0.02
	22	G	法華經	7	23	149	品能隨喜讚善者	片面	(6.1)	1.2	0.02
	23	H	法華經	5	15	77	我常遊諸國未曾見是事	片面	(8.2)	1.3	0.02
	24	H	法華經	7	24	124	妙法蓮華經卷第七	片面	(7.3)	1.3	0.02
	25	H	法華經	5	15	78	忽然從地出願說其因緣	片面	(8.0)	1.3	0.02
	26	I	法華經	2	3	380	諸凡愚獨處	片面	(5.0)	1.3	0.02
	27	I	法華經	2	3	377	如是之人乃可	片面	(5.0)	1.3	0.02
	28	I	法華經	2	3	379	惜身命乃可	片面	(5.0)	1.3	0.02
	29	J	法華經	5	14	67	處住安樂行若口宣說若誦經時不樂說人	片面	20.5	1.2	0.02
	30	J	法華經	5	14	68	及經典過亦不輕慢諸法師不說他人好	片面	20.5	1.1	0.02
	31	J	法華經	5	14	69	惡長短於声聞人亦不称名說其過惡亦不	片面	19.5	1.1	0.02
	32	K	法華經	1	1	153	墮弥勒当知初仏後仏皆同一字名日月燈	片面	21.8	1.2	0.02
	33	K	法華經	1	1	152	仏皆同一字名日月燈明又同一姓姓頗羅	片面	21.7	1.3	0.03
	34	L	法華經	5	15	119	我從久遠來教化是等衆	片面	21.8	1.3	0.02
	35	L	法華經	5	15	120	爾時弥勒菩薩摩訶薩及無數諸菩薩等心	片面	21.8	1.3	0.02
	36	L	法華經	5	15	121	生疑惑怪未曾有而作是念云何世尊於少	片面	21.8	1.3	0.02
37	M	法華經	8	28	59/90	況受持誦誦正憶念解其義趣如說修行若/ 不虛亦於現世得其福報若有人輕毀之言	両面	20.8	1.2	0.05	
38	N	法華經	4	10	64	能書持誦誦供養	片面	(7.2)	1.4	0.02	
39	N	法華經	1	1	57	優婆塞優婆夷	片面	(4.7)	1.4	0.02	
40	N	法華經	5	15	34	虚空是菩薩衆中	片面	(6.7)	1.2	0.02	
41	O	法華經	2	4	162	來世当得作仏一切諸仏秘藏之法	片面	(19.0)	1.4	0.04	
42	O	法華經	4	11	138	無量余經亦未為難若仏滅後於惡世中	片面	21.8	1.3	0.02	
43	P	法華經	8	27	103	諸法中得法眼淨	片面	21.8	1.3	0.02	
44	P	法華經	8	27	102	莊嚴王本事品時八万四千人遠塵離垢於	片面	21.7	1.3	0.02	
45	P	法華經	8	27	101	者一切世間諸天人民亦禮拜仏說是妙	片面	21.7	1.3	0.02	
46	P	法華經	8	27	100	可思議諸善功德若有人識是二菩薩名字	片面	21.7	1.3	0.02	
中層(番付)	47	N?	法華經	6	18	76	行其福不可限 七十六下	片面	(12.9)	1.3	0.02
	48	J	法華經	5	14	40	亦不親近增上慢人貪著小乘三藏學者 接 了六十上	片面	21	1.3	0.02
	49	J	法華經	5	14	60	若有比丘於我滅後入是行處及親近處 接 了六十下	片面	20.5	1.3	0.03
	50	G	法華經	7	23	163	說是葉王菩薩本事品時八万四千菩薩得 八十九	片面	20.7	1.3	0.02
	51	D	法華經	2	3	191	上妙細○佃直千億鮮白淨潔以覆其上 二 十一	片面	21.8	1.2	0.02
	52	G	法華經	2	4	197	生宿世善根 二十八ノ下	片面	(11.1)	1.3	0.02
	53	C	法華經	3	7	220	多羅三藐三菩提心大通智勝佛過八万四 三十九下 ○(サインか?)	片面	20.4	1.3	0.02

表2 經典番号相對表

No.	経文	法量(長さ)	幅	厚さ	行数
1	有所問惟願世尊分別解説	13	1.3	0.02	1-6行目
2	○著地合掌右繞散華燒香懸	13.8	1.3	0.02	2-11行目
3	養右	2.3	1.3	0.02	2-11行目
4	伎樂尊重恭敬以微妙音歌甚	14.6	1.3	0.02	2-12行目
5	功德隨喜歡喜	16.3	1.3	0.02	2-13行目
6	深句義讚仏	5.1	1.3	0.02	2-13行目
7	現在諸仏諸修慈身行慈口行修慈心行修	21.8	1.3	0.02	2-8行目
8	是為菩薩修慈身行以微妙音歌甚深区義	21.8	1.3	0.02	3-11行目
9	讚歎如來無量功德是為菩薩修慈口行因	21.8	1.3	0.02	3-12行目
10	修慈心行明天是則菩薩摩訶薩於過去当	21.8	1.3	0.02	3-13行目
11	來今現在諸仏所習身口意習行正念仏慈	21.7	1.3	0.02	3-16行目
12	仏告明天云何菩薩摩訶薩於過去当來今	21.7	1.3	0.02	3-1行目
13	復告明天又菩薩摩訶薩於過去当來今現	21.7	1.3	0.03	3-1行目
14	衆生所亦修慈身行修慈口行修慈	18.5	1.3	0.03	3-2行目
15	念仏功德善男子菩薩摩訶薩当念如來堅	21.5	1.3	0.02	3-3行目
16	固土無上土最勝土為師土王勇猛無畏自	21.8	1.3	0.02	3-4行目
17	度度彼自安彼自滅滅彼說眞諦法安立	21.8	1.3	0.02	3-6行目
18	衆生心無諂飾淨戒具足力無畏辯永除障	21.8	1.3	0.02	3-7行目
19	習於法自在無与等者如是專心念仏功德	21.8	1.3	0.02	3-8行目
20	已右膝著地散華燒香幡繪幢蓋伎樂供養	21.8	1.3	0.02	3-9行目
21	意行等念衆生明天云何菩薩摩訶薩於三	21.8	1.3	0.02	4-3行目
22	世衆生所應修慈身口意行等念衆生如是	21.8	1.3	0.02	4-4行目
23	信○	5.1	1.3	0.02	不明

表3 『仏説甚深大廻向經』の確認された経文
(※行数は各節に任意で番号を振ったもの)

注

- (1) 池中の堆積土を取り上げ時、完全には分けるのが難しく、区別しきれない一群があり、再整理段階で一旦「中～下層」としたが、形状・筆致等から分析すると、中層と同一書体のものが多く含まれることから、概ね中層に帰属させて良いと考えられる。
- (2) 一般的に両面書写が古く、15世紀以降に片面書写が主流になるといわれているが、本資料で少量みられる両面書写についてどう捉えるべきかは課題の一つである。
- (3) 柿経筆致の分類については、筆致の特徴（大きさや異体字の使用、墨の濃淡、節の区切りなど）により区別した。表1では中・下層ごとに分類した書き手が経典のどの部分を書写したのかを示した。判断できたものの全てを掲載できかねるため、その一部のみの例を挙げるに留まったことをご容赦いただくとともに筆者の浅薄のため、誤りや事実誤認等があれば、ご指摘いただきたい。
- (4) 本文で述べたように、今回分類した筆致の中には、同一経典の中のまとまった行数が確認できることから、同一の回に誰がどこからどこまでを写経したか、順番等の写経の具体像を把握できる可能性がある。また中層の中には経文の末尾に数字が記されているものが見受けられる。これは建長寺で出土した柿経などでも多くみられる経典「番付」と認識されているものであるが、仏法寺では経典の巻、行とは一致しないのものが多くあり、またその末尾に解読はできなかった文字が記されているものが見られた(写真1-Q)。これは写経の分担者に関わるものではないかと考えられるが確認には至らず、今後の課題としておきたい。
- (5) 開結二経とは本経の前によむ開経「無量義経」と後に読む結経「仏説観普菩薩行法経」を併せた呼称。浄土三部経は「阿弥陀経」「仏説観無量寿経」「金剛般若波羅蜜経」を併せた総称。

- (6) 別紙表 2 参照。
- (7) 貫達人・川副武胤 1959『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市・吉川弘文館
- (8) 註 6 に同じ
- (9) 鎌倉市二階堂所在の覚園寺は北条貞時によって創建された真言宗の寺院で、関東大震災により倒壊した開山塔の下から柿経が偶然発見された。経文は阿弥陀経の両面写経で、その中に「正慶元年十一月二十四日円信〇阿二丁」「正慶元年十一月十八日比丘尼道阿聖靈往生極樂為也敬白孝子法橋円信花押」の願文が見ついている。鎌倉周辺の地域では、栃木県足利市史跡樺崎寺跡に柿経の出土事例がある。樺崎寺は清和源氏嫡流であり、鎌倉幕府草創期からの有力御家人である足利義兼によって文治五年（1189）に創建された寺院で、発掘調査により平泉の中尊寺や毛越寺などを模したと考えられる浄土庭園が検出されている。柿経はこの園池西岸の第Ⅲ期とされる堆積土層から見ついている。写経された 1 巻分が池に流し入れられた様子や、別の調査区から径 75×50 センチほどの穴が穿たれ、そこに柿経を埋納した状況が検出されたことから、数度にわたる柿経の納経が行われたことが推察される（足利市教育委員会文化課 2008・大澤 2010）。樺崎寺の園池改修という大事業に伴って行われた足利一族の追善供養のための柿経の埋納と推測される（大澤前掲）。この出土状況は仏法寺跡で検出されたものと近似しており、第Ⅲ期は南北朝～室町時代とされることから時代的にも符合する。
- (10) 「頓證（証）菩提」とは段階的な修行の階梯を経ずに速やかに菩提（覚り）の妙果を得ること。出離生死、疾証菩提、速証菩提、頓証仏果ともいう。極樂往生を祈る願文や塔婆に記されることがある（浄土宗大辞典編纂委員会 2016『新纂浄土宗大辞典』）。

参考文献（執筆者五十音順）

- 足利市教育委員会文化課 2008『足利市埋蔵文化財調査報告 57 史跡樺崎寺跡（法界寺跡）発掘調査報告書発掘調査概要』足利市教育委員会文化課
- 足立佳代 2006「遺物からみた中世寺院 柿経」『季刊 考古学 特集中世寺院の多様性』第 97 号 雄山閣
- 大澤伸啓 2010『樺崎寺跡 足利一門を祀る下野の中世寺院』同成社
- 覚園寺 1966『重要文化財 覚園寺開山塔・大燈塔修理工事報告書』
- 木村美代治・藤原静香「建長寺出土の柿経について」『鎌倉考古』第 37 号 鎌倉考古学研究所
- 鈴木絵美 2023「中世鎌倉における「柿経」をめぐる諸問題—建長寺出土柿経を中心として」『鎌倉市教育委員会文化財調査研究紀要』鎌倉市教育委員会
- 浄土宗大辞典編纂委員会 2016『浄土宗大辞典』（Web 版）<https://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/>
- 福田誠 2003『神奈川県 鎌倉市五合樹遺跡(仏法寺跡)発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 松浦五輪美・原田憲二郎 1992「柿経の考察—分類と編年について—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会
- 三村昌史 2003「鎌倉市仏法寺跡」から出土した柿経の樹種構成」『神奈川県 鎌倉市五合樹遺跡(仏法寺跡)発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 貫達人・川副武胤 1959『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市 吉川弘文館